

Title	オーストリア刑事法学の一断面：第二次大戦後の雑誌論文目録
Sub Title	Ein Ausschnitt aus dem gegenwärtigen Stand der österreichischen Strafrechtswissenschaft
Author	宮沢, 浩一 (Miyazawa, Kōichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.12 (1968. 12) ,p.51- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19681215-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オーストリア刑事法学の一断面

—第二次大戦後の雑誌論文目録—

宮 沢 浩 一

解 題

一 さきに、オーストリア刑法雑誌論文目録(本誌第四一巻七号四五頁以下)において、一九一〇年から一九二〇年に至る、第一次世界大戦前後のごく短かい期間のオーストリア刑法学の状況を整理したことだったが、ここに、その続篇ともいべき資料をまとめてみた。一九二一年から一九四五年迄の激動の二十数年が空白であるが、これは、もつばら、慶應義塾の図書館、法学部図書室・資料室の整備が遅れていることによるものであり、やがていずれは補充されるであらう。

ドイツと同じように、戦に敗れ、刑法、少年裁判所法などの分野において全面改正・部分改正を余儀なくされたオーストリアの戦後の刑法学の動きは、我々研究者の意欲をそそのかに充分なものを持っている。殊に、一九六一年少年裁判所法の成立までの少年法改正の動きについて、かなり多くの発言があり、じつくりと検討すべき

問題点をかかえているように思われる。文化的にも、地理的にも、ドイツ、スイス、イタリアと隣接し、フランスの動向にも注意を払いつつ、自分自身の道を歩んでいるオーストリア刑法学には、我々として、今後、それを受けとめ、かつ学ぶべき多くのものを持っていると思う。

二 オーストリアの刑法については、わが国の研究者の関心は、ドイツのそれに比べて必ずしも高くはないと思われる。その中であつて、早稲田大学の斎藤金作教授の主宰されるドイツ刑法研究会は、一九六二年、一九六四年、一九六八年の各刑法草案を邦訳され、多大の寄与をして居られるし(刑事基本法令改正資料第五号、九号、一四号)、平野教授(オーストリア刑法草案について、法律時報三四卷三号七二頁以下、後に、犯罪者処遇法の諸問題、一九六三年一八八頁以下に再録)、香川教授(学習院大学法学部研究年報3、一九六七年四三頁以下)の手で、それぞれの時期の刑法改正の状況がフォローされていることは、高く評価されてよいと思われる。わが国の比較法の知識が、

多方面にわたつて展開しつゝあることを考えるとき、同じドイツ語圏の、そして刑法典、刑法学の伝統において、ドイツと比べて決してまさるとも劣らぬ程の歴史と実績とを備えているオーストリア刑法学の成果を検討する必要があることを忘れてはならない。

三 此の資料は、*Juristische Blätter* 及 *Oesterreichische Juristenzeitung* に発表された刑事法関係の論文よりなる。刑法の解釈などに關係を持つと思われた若干の他の法部門の論文も、採録されているが、これは、いささか恣意的に選択されている。法律新聞の方は、一八七一年に創刊された伝統的な雑誌であり、オーストリア法曹新聞は、第二次大戦後に発刊されたものであるが、いずれも、論説、判例、立法欄をもち、その時々各法律分野の理論と実務の現状を反映しているものと思われる。両誌からの論文のチェックは、私がこれを行ない、それをカードにとつたのは、私の研究会の会員諸君であつた(高橋隆一、布施建郎、丸紅飯田株式会社勤務、本間久雄、昭和電線電機株式会社勤務)。カードの整理や内容のチェックなどは、飯田光子さんの協力を得た。勿論、誤謬があるとすれば、すべて私の責任である。特に、五〇〇枚程のカードを分類するに當つて、論文の内容を完全に読んだわけではないので、不適當な分類がなされているかも知れないし、特に、刑事訴訟法についての私の知識は貧困であるから、その項目・分類ともに、全く自信がない。

四 なお、*Oesterreichische Zeitschrift für öffentliches Recht* についても検討し、若干の刑事法関係の論文を見つけたので、人名の紹介中にこれを記した。ノヴァコウスキーやロエダーは、ドイツ

の全刑法雑誌やスイス刑法雑誌にも論文を発表している。私の予定では、これらの雑誌についても、なるべく早い時期に創刊号からの目録を発表する筈であるから、その折に、これにふれたいと考えている。この仕事が大體において終了した後、西欧の刑事法関係の雑誌論文を、人名・事項に分けて、そのすべてを一冊にまとめるつもりである。本稿は、その予備的な仕事である。同学の諸氏の論文検索の時間をいささか短縮しうることを念願して、公表する次第である。

《執筆者の概略》

法律新聞、オーストリア法曹新聞は、殆んど、オーストリアの学者・実務家からの寄稿で占められているが、著名な外国の学者も論稿を寄せている。刑法の分野だけに限定してみると、ドイツのパウマン、ドレーアー、R・ランゲ、ジーガート、シュペンデル、ヴェルテンベルガーの論文があり、スイスからは、クレルク、フライの名が見える。

オーストリアの学者については、その多くについて、細かい事實は殆んど知られていないので、次に、分かつただけの事柄を書きとめてみる。何も知られていないというよりは、少しでも分かっていることの方が、まだしもよいという程度のニュースではあるが、詳しい調査は、他日を期したいと考えている。

資料編の中に、二編以上の論文のある著者の経歴と、本資料の整理番号をあげておく。

※

アダモヴィッチ (Adamovich) 一八九〇年四月三〇日に生れ、一九五五年一月二三日に死去したウィーン大学の憲法学の正教授で、併せて連邦憲法裁判所長官を兼任していた。その人と作品について *Adolf Merkl, Ludwig Adamovich + Ost. Zeitschr. f. öf. Recht*, Bd. 7, 1955, S. 1 ff. に詳しい知られる (13, 301)。

ベック (Beck) ウィーンとニエーヨークで弁護士を開業してゐるといふことの他に、知るべきがである (52, 226, 373)。

バンベルガー (Bamberger) *Jugendstrafrecht und Verfahren*, 1952 と同じ著書で知られている。地裁の少年部の裁判官でもある。

グラーツを中心と活躍してゐる者である (276, 277, 417, 418, 419, 419-a, 419-b)。

ハイトナー (Beitner) インズブルックの青少年局の参事でもある (420, 421)。

ブラウン (Braun) 博士号をもつ。ウィーンで活躍してゐるといふことのみ、分かっている (14, 35a)。

ブローダ (Broda) 一九六二年頃、連邦司法大臣であつた人 (26-a, 216, 311)。

ブイトリンスキー (Bydliński) グラーツ大学私講師という肩書は、一九五八、五九年頃についた。恐らく、グラーツ大学の民法の研究者でもある。なお、*Schadenrecht und Arbeitskampf*, in: *Österreich. Zeitschrift für öffentliches Recht*, Bd. 9, 1958/59, S. 518 ff. なども (156, 157, 266)。

カザフラ (Cazafra) 一九四八年、一九五三年頃に、ウィーン少年裁判所長であつた人 (422, 423)。

チェヒョウスキー (Czechowski) ウィーンに住む、博士号を持つ者といふことの他に、何も知るところがない (240, 355, 356)。

ディートルリッヒ (Diétrich) ウィーンで弁護士を開業してゐる人 (87, 115)。

ドライシヒ (Dolesch) 司法省参事官の肩書を持つてゐる。なお、*A. Mergen (Hg.): Kriminologie-Heute 1961*, S. 23 ff. に小論を寄せてゐる (217)。

エーレンツヴァイシヒ (Ehrenzweig) ウィーン大学教授であつて、法学に論文が多い (279, 320)。

フォレグガー (Foregger) 一九五五年には、検察官、一九六二年には、ウィーン連邦司法省の部長の肩書を持つ (364, 425)。

フラウワルナー (Frauwallner) インンムンツァットの弁護士 (162, 188, 218, 312)。

ガイタ (Galg) ウィーンの弁護士 (241, 365)。

ガイスマウパー (Gaisbauer) イン河畔のブラウナウの、恐らく弁護士であらう (89, 116)。

グラスベルガー (Grabberger) ウィーン大学教授で、同大学の犯罪学研究所長を兼ねる。オーストリアの代表的な犯罪科学者である。論文として、*Versuch einer dynamischen Strafrechtstheorie*, *OZaR*, Bd. 7, 1956, S. 288 ff. & *Psychologie des Strafverfahrens*, 1950 年、有るべき (15, 16, 17, 18, 118, 128, 129, 201, 202,

323, 455)*

グロエスワング (Großwäng) ウェルスの検察官である (1, 35, 36, 146, 198, 285)。

ハルビャヒ (Harbich) ウィーンの検察官である (97, 241-a, 426, 427)。

ハイドリッヒ (Heidrich) Jugendgerichtsgesetz (JGG 1961), 1960の共著者として有名である。最高裁判所判事のようにある (147, 288, 375, 376, 428, 429, 430, 431)。

ヘンリッヒ (Henrich) ウィーン大学の私講師である (304, 305)。
ヘルツ (Hert) ウィーン大学の名誉講師 (Hon. Dozent) であり、弁護士でもある (189, 190, 242, 377, 393, 394)。

ホーエンライイトナー (Hohenleitner) インスブルック大学リットラー教授に提出した論文 Tatbestand und Werturteil, 1933でデビューした人である。一九四八年頃には、インスブルック高等裁判所の判事であったが、一九五四年には、インスブルック大学員外教授を兼ね、その後、同大学の正教授となった。一九五七年のリットラー祝賀論文集には、Schuld als Werturteil という論文を寄せている (121, 122, 290, 359, 395, 403)。

ホロウ (Horow) Grundriß des österreichischen Strafrechts, Allg. Teil, 1. Hälfte, 1947, 2. Hälfte, 1952, で知られているホロウは、一九四七年には、グラーツ大学の私講師であったが、一九四九年以来、同大学教授である (29, 64, 203, 220, 262, 433, 457)。
ホーヘルマン (Hovelmann) 学者ではなく、実務家であろうが、

肩書もないから、殆んど何も分らない (291, 367)。

フーパー (Huber) ウィーンの高等裁判所連合部長である (204, 252)。

ヤホダ (Jahoda) ウィーンの弁護士であるが、なかなかの論客である (2, 205, 313, 357, 389)。

ヤノウスキー (Janowsky) ウィーンの高等裁判所の判事であるが、一九五九年には連合部上席判事、一九六三年には連合部長の肩書が見える。論客でもある (45, 110, 130, 206, 229, 243, 314, 368)。

カデチカ (Kadečka) この人については、前稿において若干おいた (本誌四一巻七号五一頁)。検察官、司法省参事官を経て、ウィーン大学教授となった。ナチスに迎合的な論文も残っている。大戦後は、リットラーなどとともに、刑法改正事業に関係していたが、一九六四年没した。カデチカについては、ブラウン (14)、グラズベルガー (16)、ノヴァコウスキー (23)、リットラー (25-a) が書いている。Gesammelte Aufsätze, 1959に、その主要な論文が再録されている (99, 148, 169, 339)。

カフカ (Kafka) グラーツ地方に戦後、占領政策を推進するための機関 (Sicherheitsdirektion) が出来て、その局長だつたと思われる (38, 39)。

カニアク (Kaniak) 憲法裁判所の裁判官であり、注釈書 Strafgesetz, 5. Aufl. 1960 で知られている (40, 100, 207)。

キツツル (Kittl) アウスゼーの地方裁判所判事である (268, 268-a, 435)。

キートン (Kühn) ウーレンの弁護士 (59, 131)。

クンスト (Kunst) ウーレンに住み、裁判官、検察官を歴任し、
旧法省の参事官となった (66, 132, 221, 233, 269, 270, 271, 390,
396, 435-a, 460)。

リープンヤー (Liebcher) ウーレンの検事、そして一九五六年以
降は、検事長の出立の主任 (21, 46, 68, 195, 253, 257, 263,
286, 308, 327, 328, 340, 352, 405)。

リンケ (Linke) ウーレンの司法省の判事、そして一九五五、五
六年に検事の肩書を持つことになる (47, 48, 123, 329)。

ラントナー (Lachmayer) ウーレン高等裁判所の首席判事で
449 (41, 42)。

マリヤン (Malanik) ウーレン地方裁判所長になる。著書
Lehrbuch des Strafrechts, Bd. 1, Allg. 1. Teil, 1947, 2. Bd. Bes.
Teil, 1. Teil, 1948, 2. Teil, 1949. マリヤンは、この「リープン
ヤー」の著書に多くの参考 (JBl. Jg. 88, 1966, S. 79 ff.) (3, 133, 149,
164, 182, 208, 209, 330, 331, 345, 346, 347)。

マルチヤ (Marcic) サルツブルク大学の哲学学部の教授で、
最近、法学部関係のモノグラフや論文を数多く発表し、
「Die Vom Gesetzestat zum Richterstat, 1957; Verfassung
und Verfassungsgericht, 1963; Verfassungsgerichtsbarkeit und
Reine Rechtslehre, 1966 など」が、よく知られた著書である (カウ
マン・現代法学の諸問題、卷末文献目録三二頁以下に主要な論文を
あげておいた)。

マルシヤン (Marshall) 連邦司法省の参事官になる (101-a, 332,
370)。

マトウシヤン (Matouschek) 連邦司法省の検事、参事官の職
を歴任した (113, 134, 234, 246, 246-a)。

モーザー (Maier) カンテンブルクの弁護士になる (172, 222, 254)。
ノワコフスキ (Nowakowski) Fortgesetztes Verbrechen und
gleichartige Verbrechenmenge, 1950 というモノグラフで、

インスブルク大学私講師となり、一九五三年頃に同大学教授に就
任した。Das österreichische Strafrecht in seinen Grundzügen.
1955 (紹介、法学研究二九巻五号七八頁以下) 'Das österr
sche Strafrecht, in: Das ausländische Strafrecht der Gegenwart,
1959, S. 415 ff. Der allgemeine Teil des österreichischen Straf-
gesetzentwurfes in der Fassung des Ministerialentwurfes von
1964, 1965 (紹介、香川、京都大学法学部研究年報の四三頁以下) 等
の著書がある。Zum Problembereich der Geltungsbereiche, Öst.
Zeitschr. f. öff. R. Bd. 6, 1953, S. 10 ff. (4, 5, 22, 23, 24, 135,
136, 150, 151, 152, 184, 191, 192, 199, 283, 293, 309-a, 333, 360,
379, 380, 397, 407, 408, 436, 437)

オーブンデント (Obendorf) インスブルクの地方裁判所判事
になる (315, 438)。

パウザ (Pausa) 司法省の法制調査課員になる (75, 235, 236,
439)。

ピヒラー・ドランクスラー (Pichler-Drexler) シラーの刑事判

護士である(90, 91, 92, 93, 94, 440)。

ピスカ (Piska) ウィーンの少年裁判所、地方裁判所の判事である(256, 294, 400, 409, 443)。

プラツクンマー (Platzgummer) インスブルック大学のノヴァロウスキー教授に提出した Die Bewusstseinsform des Vorsatzes. Eine strafrechtsdogmatische Untersuchung auf psychologischer Grundlage, 1964 年について注目をされている新進の研究者である(194)。

ポートル (Pöhl) リンツの高等裁判所判事である(30, 136-b, 179, 180)。

レーム (Rehm) ウィーンの検事長の肩書をもつ人(341, 342, 410)。

ライシヒ (Reisch) ウィーンの司法省参事官となつた。裁判官出身の人であり、出版年度の明記されていない少年裁判所法の好著 Jugendgerichtsgesetz の編者である(103, 136-a, 335, 444, 445, 446, 447, 448)。

リットラー (Ritter) 一八七六年二月一四日に生まれ、殆んど一世紀近く、文字通り、オーストリア刑法学を代表する学者として活躍したリットラー教授については、詳論の必要はあるまい。その七〇歳、八〇歳、九〇歳の誕生日に、祝意が表明されている。人と作品については、一九五七年の八〇歳祝賀論文集の巻頭にインスブルックのリントナーが寄稿している。リットラーに関する論稿は、グラスベルガー(15, 17, 18)、ノヴァコウスキー(22, 24)、ゼーリッヒ(26)などである。リットラーの論文は、戦後の分だけ

かなり発表されている(25-a, 153, 154, 160, 161, 181, 343, 411)。

ローター (Roeder) ノヴァコウスキーとよんで、戦後のオーストリア刑法学を背負つて立つている中心的な理論家である。著書も論文も多い。博士論文は 'Willensfreiheit und Schuld. Versuch einer gesellschaftsphilosophischen Grundlegung, 1932 年'。教授資格取得論文は 'Schuld und Irrtum im Justiz- und Verwaltungsstrafrecht, 1938 年'。その後、'多分'、'従軍などによつて'、'研究者の生活から離れていた'のであらう。ウィーン大学私講師の時に公刊した Die Erscheinungsformen des Verbrechen. Im Spiegel der subjektiven und objektiven Strafrechtslehre, 1953 年'。

イン弁護士協会創立一〇〇周年記念懸賞論文の当選作である。一九五七年にウィーン大学の員外教授になるまでは、私講師、弁護士として活躍した。一九六〇年頃、グラーツ大学正教授に就任し、今日に至つて(137, 174, 187, 295, 394, 391, 412)。

サンナー (Santer) チロル州のクークシタインヤインスマブルックで弁護士をしている(104, 258, 382)。

シマク (Schmak) ウィーンの弁護士(155, 247, 316, 317)。

シンネラー (Schinnerer) ウィーン大学の教授であつた人であらうか。論文には、退職した大学教授という肩書をつけている。ウィーンの信用金庫理事長に就任していたと思われる(6, 105, 196, 287, 353)。

シヨラム (Schramm) ウィーン大学の犯罪学研究所の助手である

女性 (212, 466)。

シフトワルツ (Schwarz) ヴァーレンで活躍している法律実務家である。恐らく、弁護士であろう (107, 371-b, 413)。

ザイラー (Seiler) 一九五八年には、グラーツ大学助手、一九六三年には同私講師、そして一九六五年には、同大学教授の肩書をもつ。刑法法の講義にまつづるのだから (14, 49, 297, 338, 385)。

ザウーリ (Serini) Tappek-Serini, Strafprozessordnung, 4. Aufl. 1960; Loising-Serini, Österreichisches Strafprozessrecht, 4. Aufl. 1952. 知られている刑法法の専門家であり、ヴァーレンの司法省の参事官級の実務家でもある (138, 139, 140, 248, 249, 265, 318, 372)。

シフトハイバー (Stoher) サルツブルクの検事局に勤務する実務家 (125, 387)。

シフトワルツ (Sturm) ヴァーレンの刑事弁護士 (250, 251, 298, 414)。

チャヂク (Tschadek) 連邦司法大臣 (388, 469)。

ワルター (Walter) 一九五〇年まで、ヴァーレン大学講師の肩書で活躍していたが、その後の消息は不明である (7, 84, 143, 213, 214, 224)。

ヴェンドロク (Verdoh) ヴァーレン大学の国憲法、法哲学の教授であり、幾多の業績を発表している。ロート・ニコルマンが、その六〇歳誕生日に祝賀の辞を発表している (25)。「二〇程」小論が収められている (27, 255)。

ワルター (Walter) グラーツ大学の刑法法の正教授でもある (8,

144, 398, 415)。

ヴァンニェン (Wentzel) ヴァーレンで活躍している上院議員である。Oberstenrat の訳語をどうするかが (227, 284, 453)。

ヴァンフリート (Winfried) ヴァーレンで活躍している弁護士である (299, 300)。

※

右にみたように、オーストリアの法律雑誌には、実務家の活躍が大へん目立つていることを知る。

《事項別論文目録》

附 表 一 覽

1. Grösswang, W.: Grenznorm Strafgesetz. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 361 f.
2. Jahoda, F.: Hundert Jahre Strafgesetz. JBl. Jg. 74, 1952, S. 477 ff.
3. Malanik, W.: Das geltende Strafrecht. ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 203 ff., 228 ff.
4. Novakowski, F.: Die Rechtsprechung des Obersten Gerichtshofes in Strafsachen. JBl. Jg. 78, 1956, S. 61, 87 ff.
5. Novakowski, F.: Die Rechtsprechung des Obersten Gerichtshofes in Strafsachen. JBl. Jg. 81, 1959, S. 437 ff.

6. Schinnerer, E.: Methodische und systematische Fragen zur Rechtsprechung des OGH. in Strafsachen. ÖJZ. 6. Jg. 1951, S. 421 ff.
7. Valters, N.: Weltfriede, Völkerrecht und Strafrecht. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 65 ff.
8. Walker, R.: Die Bedeutung des § 77(1) RDG. für das Zivil- und Strafverfahren. JBl. Jg. 84, 1962, S. 490.
- 英訳書 (英訳書)
9. Baitl, H.: Über die Notwendigkeit einer österreichischen Rechtsgeschichte. JBl. Jg. 72, 1950, S. 397 ff.
10. Brachmann (牛井 吉雄 氏 訳 註 出 題 訳 題) → 282.
11. Ehrhard, F.: Vom historischen Wahrheitswert der Digesten oder Pandekten Kaiser Justinians. JBl. Jg. 71, 1949, S. 417, 446 ff.
12. Klein-Bruckschwaiger, F.: Rechtserneuerung und Rechtsgeschichte. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 250 ff.
- 英訳 (理型) 付
13. Adamovich, L.: Adolf Merkel zum 60. Geburtstag. JBl. Jg. 72, 1950, S. 133 f.
14. Braun, R.: Promotion des Universitätsprofessors Dr. Ferdinand Kadečka zum Ehrendoktor der Staatswissenschaften an der Universität in Wien. JBl. Jg. 72, 1950, S. 103 ff.
15. Grabberger, R.: Theodor Ritter. JBl. Jg. 73, 1951, S. 325.
16. Grabberger, R.: Ferdinand Kadečka. JBl. Jg. 76, 1954, S. 353 f.
17. Grabberger, R.: Theodor Ritter 90 Jahre. JBl. Jg. 89, 1967, S. 79.
18. Grabberger, R.: Theodor Ritter. JBl. Jg. 89, 1967, S. 225.
19. Kolb, E.: Johannes Messner 75 Jahre. JBl. Jg. 88, 1966, S. 307 f.
20. Lenz, A.: Hans Gross. JBl. Jg. 70, 1948, S. 60.
21. Liebscher, V.: OLG-Präsident Dr. Wilhelm Malaniuk. JBl. Jg. 88, 1966, S. 79.
22. Nowakowski, F.: Theodor Ritter 80 Jahre. JBl. Jg. 78, 1956, S. 583 f.
23. Nowakowski, F.: In memoriam Ferdinand Kadečka. JBl. Jg. 86, 1964, S. 255 f.
24. Nowakowski, F.: Theodor Ritter zum Gedächtnis. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 197 f.
25. Reut-Nicolussi, E.: Zum 60. Geburtstag von Univ.-Prof. Dr. Alfred Verdross-Droßberg. JBl. Jg. 72, 1950, S. 106 f.
- 25-a. Ritter, Th.: Ferdinand Kadečka zum Gedächtnis. ÖJZ. 19. Jg. 1964, S. 225 f.
26. Seelig, E.: Theodor Ritter zum 75. Geburtstag. JBl. Jg.

73, 1951, S. 583.

27. Verdross, A.: Hans Kelsen zum siebenzigsten Geburtstag. JBl. Jg. 73, 1951, S. 425 f.

民法の整理

28. Ehrenzweig (ケベク判例集第1巻の改正と改訂) → 320.

29. Horrow, M.: Analogieanwendung und freie Rechtsfindung im Strafrecht. JBl. Jg. 70, 1948, S. 76 ff.

30. Pöhl, A.: Zur ausdehnenden Auslegung unserer Strafgesetze. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 169 ff.

戦争犯罪

31. Steinbauer, G.: Genocidium. ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 461.

32. Beck, H.: Verletzungen der Menschenwürde nach §4 des Kriegsverbrechergesetzes und Ehrenbeleidigung. ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 293 ff.

33. Deutsch, R.: Die strafrechtliche Beurteilung der Entfernung von Blutgruppenkategorien bei Angehörigen der Waffen-SS. ÖJZ. 1. Jg. 1946, S. 51 ff.

34. Dolp, F.: Die Strafbarkeit der Denunziation nach dem Kriegsverbrechergesetz. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 14 ff.

35. Gröbawang, W.: Die Präsomption der Rechtswidrigkeit bei Tatbeständen nach dem Kriegsverbrechergesetz. ÖJZ. 3. Jg. 1948,

S. 75 ff.

36. Gröbawang, W.: Ist Idealkonkurrenz zwischen Mord (§134 StG) und dem Verbrechen nach §1 KVG möglich? ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 199 ff.

37. Höslinger, R.: Die Rechtsüberleitung der „Erlasse“ aus der nationalsozialistischen Zeit. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 49 ff.

38. Kafka, G.: Probleme der alliierten Militärgerichtsbarkeit. ÖJZ. 1. Jg. 1946, S. 229 ff.

39. Kafka, G.: Zum Problem der Kollektivschuld. ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 34 ff.

40. Kaniak, G.: Das Gesetz im formellen Sinn und die Schlacht bei Königgrätz. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 309 ff.

41. Lachmayer, O.: Das Recht zur Verurteilung von Kriegsgefangenen und die Genfer Konvention 1949. JBl. Jg. 78, 1956, S. 85 ff.

42. Lachmayer, O.: Das Verfahren bei der Verurteilung von Kriegsgefangenen nach der Genfer Konvention 1949. JBl. Jg. 78, 1956, S. 391 ff.

43. Moser, F.: Die Denunziation im Kriegsverbrechergesetz und andere nationalsozialistische Untaten. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 415 ff.

44. Plank, R.: Zur Anwendung des §4 (1) Verschollenheitsgesetz auf Kriegsgefangenen. ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 315.

圖書展覧

45. Janowsky, N.: Auswirkungen der Europäischen Konvention zum Schutze der Menschenrechte und Grundfreiheiten auf das österreichische Recht. JBl. Jg. 81, 1959, S. 145 ff.
46. Liebcher, V.: Die Grundzüge eines Völkerstrafrechts in der österreichischen Rechtsordnung. JBl. Jg. 81, 1959, S. 385.
47. Linke, R.: Die Übernahme der Verfolgung im Ausland begangener Straftaten. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 571 ff.
48. Linke, R.: Der neue Vertrag zwischen Österreich und Jugoslawien über den wechselseitigen rechtlichen Verkehr und seine strafrechtlichen Bestimmungen. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 667.
- 外國刑法
49. Seiler, R.: Der strafrechtliche Anwendungsbereich des Koalitionsgesetzes. ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 478 ff.
- 49-a. Abel (ベキニクシ警察権とオーストリア国) → 228.
50. Bader, H.: Der Anspruch auf Rechtsbeistand nach der jüngsten Rechtsprechung des amerikanischen Obersten Bundesgerichtes. JBl. Jg. 88, 1966, S. 608 ff.
51. Bamberger, E.: Die Gerichtsorganisation Brasiliens nach der neuen Verfassung. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 385 ff.
52. Baeck, P.L.: Equity und Common Law in den Vereinigten Staaten von Nordamerika. JBl. Jg. 72, 1950, S. 130 ff.
53. Baeck (リドモーンとオーストリア) → 226.
54. Baeck (ベキニクシとオーストリア) → 373.
55. Baumann (ベキニクシとオーストリア) → 167.
56. Clerc, F.: Die Reform des schweizerischen Strafrechtzbuches. ÖJZ. 12. Jg. 1957, S. 512.
57. Dreher, E.: Die Strafrechtsreform in der Bundesrepublik Deutschland. ÖJZ. 15. Jg. 1960, S. 339 ff.
58. Fiesler (オーストリアとオーストリア) → 322.
- 58-a. Frauwallner (オーストリアとオーストリア) → 188.
59. Frauwallner (ベキニクシとオーストリア) → 218.
60. Grabberger (オーストリアとオーストリア) → 323.
61. Heidrich (オーストリアとオーストリア) → 430.
62. Hohenleitner (オーストリアとオーストリア) → 122.
63. Horrow (オーストリアとオーストリア) → 220.
64. Horrow, M.: Criminal Justice Act 1948, ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 372 ff.
65. Huber (オーストリアとオーストリア) → 325.
66. Kunst, G.: Eine kritische Stimme zur deutschen Strafrechtsreform. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 589 ff.
67. Lange, R.: Grundlagen der heutigen deutschen Strafrechtsreform. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 307 f.
68. Liebcher, V.: Code pénal. JBl. Jg. 79, 1957, S. 385 ff., 442 ff.

69. Lehnhoff (ドイツ法雑誌) → 326.
70. Liebecher (ドイツ法雑誌) → 328.
71. Linke (ドイツ法雑誌) → 329.
72. Marcic, R.: Die Normenkontrolle in der westdeutschen Bundesrepublik. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 337 ff.
73. Marcic, R.: Verfassungsgesetzbarkeit in Jugoslawien. JBl. Jg. 85, 1963, S. 341 ff.
74. Pausa (ドイツ法雑誌) → 235.
75. Pausa, E.: Strafsystem und Strafvollzug in Dänemark. ÖJZ. 15. Jg. 1960, S. 566 ff.
76. Pokrowski, J.: Schuld und Strafe im sowjetischen Strafrecht. ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 217 ff.
77. Reishofer (ドイツ法雑誌) → 237.
78. Reiter (ドイツ法雑誌) → 238.
79. Roeder (ドイツ法雑誌) → 187.
80. Schneider (ドイツ法雑誌) → 362.
81. Schwind, F.: Juristisches Leben in Westdeutschland. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 193.
82. Siebert (ドイツ法雑誌) → 386.
83. Slanicka, H.: Die Strafrechtskodifikation in der Tschechoslowakei. JBl. Jg. 72, 1950, S. 575 ff.
84. Valters, N.: Reform der juristischen Bildung in der

Sowjetunion. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 361 ff.

85. Valters (ドイツ法雑誌) → 214.

86. Wohlfarth (ドイツ法雑誌) → 225.

中 外 法 界

87. Dietrich, E.: Verwaltungsfreiheitsstrafen im Lichte der Menschenrechtskonvention. ÖJZ. 17. Jg. 1962, S. 346 f.
88. Fiferia, G.: Die Strafverhängung bei Deliktakkonkurrenz im Verwaltungsstrafrecht. JBl. Jg. 76, 1954, S. 114 ff.
89. Gaisbauer, G.: Die Tatbestände des groben Unfalls im Verwaltungsstrafrecht. JBl. Jg. 78, 1956, S. 9 ff.
90. Pichler-Drexler, E.: Notwehr und Notstand im Verwaltungsstrafrecht. JBl. Jg. 77, 1955, S. 87 ff.
91. Pichler-Drexler, E.: Subjektive oder objektive Versuchstheorie im Verwaltungsstrafrecht? JBl. Jg. 77, 1955, S. 539 ff.
92. Pichler-Drexler, E.: Straffares Unrecht ohne Verschulden im Verwaltungsstrafrecht. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 396 ff.
93. Pichler-Drexler, E.: Das Legalitätsprinzip und seine Sicherung im Verwaltungsstrafgesetz. JBl. Jg. 80, 1958, S. 33 ff. 59 ff.
94. Pichler-Drexler, E.: Das interlokale Verwaltungsstrafrecht. ÖJZ. 13. Jg. 1958, S. 561 ff.
95. Schick, P. J.: Die Säumnisbeschwerde bei Verletzung der

Entscheidungspflicht im Verwaltungsstrafverfahren. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 32 ff.

参考文献

96. Gerö, J.: Die Strafgesetznovelle 1862 und ihre Auswirkungen auf die Presse. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 141 ff.
97. Harlich, H.: Zu den Strafaktenbeständen der § 533 und 1492 RVÖ, sowie § 270 AVAVG. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 482 ff.
98. Kaan, W.: Untragbare Haftungs- und Strafbestimmungen im Gebührengesetz 1946. ÖJZ. 1. Jg. 1946, S. 518 ff.
99. Kadetzka, F.: Über den Referentenentwurf zu einem neuen Pressgesetz. JBl. Jg. 76, 1954, S. 553 ff.
100. Kaniak, G.: Das Amtshaftungsgesetz. JBl. Jg. 71, 1949, S. 141 ff., 169 ff.
101. Marvic, R.: Skizze einer Magna Charta der Presse. JBl. Jg. 77, 1955, S. 192 ff.
- 101-a. Marschall, K.: Strafbarkeit des Erwerbes von Maschinenpistolen. ÖJZ. 19. Jg. 1964, S. 113 ff.
102. Rauer, K.: Die Strafbestimmungen der Arbeitszeitordnung. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 362 ff.
103. Reissig, G.: Die Strafbestimmungen des Unterhaltsschutzgesetzes 1960. ÖJZ. 15. Jg. 1960, S. 231 ff.
104. Santner, A.: Der strafrechtliche Schutz des Patienten

gegen den Arzt. JBl. Jg. 71, 1949, S. 561 f.

105. Schinnerer, E.: Die Bedeutung der nachträglichen Genehmigung gemäss § 22 Abs. 1. DevG. für das Devisenstrafrecht. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 173 ff.

106. Schobesberger, O.: Gedanken zur Neuregelung des Abgabenstrafverfahrens. ÖJZ. 12. Jg. 1957, S. 454 ff.

107. Schwarz, A.: Polizeistrafrecht. JBl. Jg. 74, 1952, S. 537 f.

108. Szirba, R.: Die Frage der Strafkompetenz hinsichtlich der Übertretungen eisenbahnpolizeilicher Vorschriften. JBl. Jg. 75, 1953, S. 343 ff.

109. Tomandl, T.: Die sittenwidrige Kündigung im Lichte der Rechtsprechung des OGH. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 33.

参考文献

110. Janowsky, N.: Die Besonderheiten des gerichtlichen Strafverfahrens. JBl. Jg. 74, 1952, S. 509 ff.

111. Neidl, W.: Verhältnis des Steuerstrafrechtes zum allgemeinen Strafrecht. ÖJZ. 1. Jg. 1946, S. 231.

参考文献

112. Jensch, F.: Ist der wirtschaftliche Streik strafbar? ÖJZ. 12. Jg. 1957, S. 337 ff.
113. Matouschek, A.: Die Strafbestimmungen der Arbeitszeit-

ordnung. ÖJZ. 10 Jg. 1955, S. 193 ff.

114. Seiler, R.: Der wirtschaftliche Streik im österreichischen Strafrecht. JBl. Jg. 80, 1958, S. 85.

判例集

115. Dietrich, E.: Ist eine allgemeine Geschwindigkeitsbegrenzung im Stadtverkehr zulässig? JBl. Jg. 72, 1950, S. 525 f.

116. Gaisbauer, G.: Zur Problematik der herrschenden Lehre vom Unfallbegriff. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 32 ff.

117. Glassl, K.: Die Straßenverkehrsordnung 1960. JBl. Jg. 84, 1962, S. 229 ff.

118. Grabberger, R.: Bericht über den internationalen Lehrgang über die Kriminologie des Verkehrsunfalls. ÖJZ. 13. Jg. 1958, S. 152 ff.

119. Hartmann, R.: Die Erforschung des Sachverhaltes beim Verkehrsunfall. ÖJZ. 13. Jg. 1958, S. 90 ff.

120. Hellbling, E.: Das Kraftfahrzeuggesetz 1955. ÖJZ. 11. Jg. 1956, S. 120 ff., 141 ff., 169 ff.

121. Hohenleitner, S.: Vertrauensgrundsatz und gebotene Vorsicht im Straßenverkehr. ÖJZ. 16. Jg. 1961, S. 146 ff.

122. Hohenleitner, S.: Das neue Schweizer Straßenverkehrsgesetz und der Vertrauensgrundsatz. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 427 f.

123. Linke, R.: Können privatrechtliche Ansprüche im zwi-

schensstaatlichen Verkehr in Strafsachen berücksichtigt werden? ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 486 ff.

124. Nurscher, G.: Gerichtliche Strafbarkeit der Trunkenheit am Steuer. ÖJZ. 15. Jg. 1960, S. 97 f.

125. Stotber, H.: Rechtspolitisches zur Kraftfahrverkehrsgesetzgebung. ÖJZ. 6. Jg. 1951, S. 245 f.

参考文献

126. Bess, W.: Die Strafgesetzreform und ihre Probleme. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 378 ff.

126-a. Broda, Ch.: Einige Probleme der österreichischen Strafrechtsreform. ÖJZ. 19. Jg. 1964, S. 281 ff.

127. Eiger, A.: Strafgesetznovelle 1950? JBl. Jg. 71, 1949, S. 518 ff.

128. Grabberger, R.: Die Arbeiten der österreichischen Strafrechtskommission. JBl. Jg. 81, 1959, S. 85 ff.

129. Grabberger, R.: Strafrechtsreform und Vollzugseinrichtungen der Freiheitsstrafe. JBl. Jg. 84, 1962, S. 285 ff.

130. Janovsky, N.: Strafrechtliche Reformfragen. JBl. Jg. 76, 1954, S. 430 ff.

131. Kübl, F.: Neuerungen im jüngsten österreichischen Strafgesetzentwurf, die keine Verbesserungen sind. JBl. Jg. 83, 1961, S. 588 ff.

- 131-a. Kittl (ケーネトリッ刑罰法學雜誌に於ける論考) → 262-a
 132. Kunst (社会・政治と法律の關係に於ける論考) → 270.
 133. Malaniuk, W.: Das Strafgesetzbuch und seine Reform.
 JBl. Jg. 75, 1953, S. 221 ff., 251 ff., 283 ff.
 134. Matoušek, A.: Zur Strafrechtsreform. ÖJZ. 11. Jg.
 1956, S. 459 ff.

135. Nowakowski, F.: Strafgesetz- und Strafvollzugsreform.
 JBl. Jg. 80, 1958, S. 193 ff.

136. Nowakowski, F.: Die Arbeiten der österreichischen Strafrechtskommission. JBl. Jg. 81, 1959, S. 197 ff.

- 136-a. Reissig (刑法雑誌に於ける論考) → 448.
 136-b. Pöhl, A.: Zur sprachlichen Fassung des Strafgesetzesentwurfes 1964. ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 36 ff.

137. Roeder, H.: Vergeltungsidee und Vorbeugungsgedanke im Spiegel der Strafrechtsreform. JBl. Jg. 83, 1961, S. 137 ff.

138. Serini, E.: Gedanken zum Entwurf einer Strafgesetznovelle des Staatsanwaltes Dr. Johann Lustig. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 34 ff.

139. Serini, E.: Die parlamentarische Enquete zur Vorbereitung einer Strafgesetzreform. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 341 ff.

140. Serini, E.: Die Fortschritte der österreichischen Strafrechtsreform. ÖJZ. 12. Jg. 1957, S. 566 ff.

141. Serini (ケーネトリッ刑法草案に於ける私的領域の侵害) →

265.

142. Strobl, K.: Der Codex alimentarius Austriacus und die Codexkommission. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 245 ff.
 143. Valters, N.: Grundsätzliches zur Strafrechtsreform. JBl. Jg. 72, 1950, S. 328 ff.
 144. Walter, R.: Die Lehre von der Gesetzestechnik. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 85 ff.

泉 誌 編

一 泉 編

145. Eckert, F.: Existenzgefährdung und Eigenbedarf. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 57 ff.

146. Größwang, W.: Organisationsverbrechen oder Prinzip der vereinfachten Norm im Strafrecht. JBl. Jg. 72, 1950, S. 25 ff.

147. Heidrich, K.: Die Bedeutung gewerbsmäßigen Handels im Strafrecht. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 391 ff.

148. Kadetka, F.: Drei alte Fragen der Strafrechtsdogmatik in neuem Licht. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 393 ff.

149. Malaniuk, W.: Moderne Strafrechtslehren. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 398 ff.

150. Nowakowski, F.: Zur Entwicklung der Strafrechtslehre in Deutschland nach 1945. JBl. Jg. 76, 1954, S. 134 ff., 159 ff.

(紹介 斎藤=西原, 早稲田法学三二卷一・二号三四五頁以下)

151. Nowakowski, F.: Bemerkungen zu Rittlers Strafrechts-

lehren—eine Buchbesprechung. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 549 ff.

152. Nowakowski, F.: Verknappte Wahlfeststellungen? JBl. Jg. 80, 1958, S. 380 ff.

153. Ritter, Th.: Die Wiederkehr des Naturrechts im Strafrecht. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 347 ff.

154. Ritter, Th.: Subjektivismus und Objektivismus im Strafrecht. JBl. Jg. 77, 1955, S. 485 ff.

154-a. Roeder (長根浩田と照久と長根の取合ハト益の取合) → 138.

155. Schimack, A.: Koupierung von Tatbestände und deren Folgen. JBl. Jg. 68, 1946, S. 434 f.

因 果 論 考

156. Bydliński, F.: Zum gegenwärtigen Stand der Kausalitätstheorie im Schadensrecht. JBl. Jg. 80, 1958, S. 1 ff.

157. Bydliński, F.: Haftung bei alternativer Kausalität. JBl. Jg. 81, 1959, S. 1 ff. 中の川野と照久の論考

158. Lorenz, E.: Kausalität, der 134 StG und ein Schulbeispiel Lammasschs. JBl. Jg. 77, 1955, S. 373 ff.

上 卷 (長 根 考)

159. Palkauf, J.: Reflexbewegungen. JBl. Jg. 74, 1952, S. 32 ff

160. Ritter, Th.: Die finale Handlungstheorie im Strafrechtssystem Maurachs. JBl. Jg. 77, 1955, S. 613 f.

161. Ritter, Th.: Um das Gebot, Verbrechen zu verhindern.

(§ 212 StG.) Zwei Fragen. JBl. Jg. 85, 1963, S. 61 f.

判 例 考

161-a. Bydliński (クローネの精神の疾病を原因) → 266.

161-b. Fleisch, H.: Der chirurgische Eingriff aus der Sicht des Juristen. ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 421 ff.

162. Frauwallner, J.: Arzt und Strafgesetz. JBl. Jg. 71, 1949, S. 304 f.

163. Jensek (雜誌クルウの取合) → 112.

164. Malanink, W.: Das Verfügungsrecht über den eigenen Körper. JBl. Jg. 81, 1959, S. 521 ff.

164-a. Pichler-Drexler (長根浩田と照久の最初と後への取合論考) → 90.

165. Pichler-Drexler (長根浩田と照久の長根浩田考) → 92.

166. Seiler (クローネと照久と長根の取合) → 114.

概 論 — | 第

167. Baumann, J.: Der Schuldgedanke im heutigen deutschen Strafrecht und vom Sinn staatlichen Strafans. JBl. Jg. 87, 1965, S. 113 ff.

168. Jahoda (真田の論考と照久の取合) → 205.

169. Kadetka, F.: Strafrecht und Willensfreiheit. ÖJZ. 8. Jg.

1953, S. 337 ff.

170. Lenz, H.: Neuere biologische Gesichtspunkte zum Problem der Schuldhaftigkeit. JBl. Jg. 74, 1952, S. 79 f.

171. Lenz, H.: Gesellschaft für Strafrecht und Kriminologie. Verbrechen und Schuld nach modernem Strafrecht. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 465.

172. Moser, B.: Wahrscheinlichkeit und Kausalität, Willensfreiheit und Schuld. Zur Anwendung physikalischer Erkenntnisse auf das Recht. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 29 ff.

173. Ratzenhofer, G.: Willensfreiheit im rechtlichen und im philosophischen Sinne. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 297 ff.

174. Roeder, H.: Die Lehre von der Willensfreiheit in der strafrechtsphilosophischen Doktrin der Gegenwart. JBl. Jg. 86, 1964, S. 229 ff.

175. Wildner, H.: Der Determinismus. JBl. Jg. 68, 1946, S. 449 ff.

176. Zarl, J.: Die Bedeutung und Deutung von Schuld und Strafe im österreichischen Strafrecht. JBl. Jg. 88, 1966, S. 12 ff.

編者

179. Maier, J.: Die Geisteskranken und das ASVG. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 486 ff.

著者

178. Loy, D.: Bedingter Vorsatz und bewußte Fahrlässigkeit. JBl. Jg. 86, 1964, S. 590 ff.

179. Pöhl, A.: Böser Vorsatz und unbewußtes Wissen. ÖJZ. 16. Jg. 1961, S. 66 f.

180. Pöhl, A.: Bedingter Vorsatz. ÖJZ. 17. Jg. 1962, S. 7 ff.

181. Rittler, Th.: Der böse Vorsatz und das Bewußtsein, Unrecht zu tun. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 549 ff.

判者

182. Malaniuk, W.: Fahrlässige Krida: Der Hassardeur im Gegensatz zum optimistischen und verantwortungsbeubenen Unternehmer. JBl. Jg. 82, 1960, S. 409 ff.

183. Meyer, R.: Die Ahndung ärztlicher Verfehlungen. JBl. Jg. 80, 1958, S. 330.

184. Nowakowski, F.: Zur Theorie der Fahrlässigkeit. JBl. Jg. 75, 1953, S. 506.

185. Wahle, K.: Grobe Fahrlässigkeit. JBl. Jg. 83, 1961, S. 497 ff.

標者

186. Horak, F.: Der Rechtsirrtum des Jugendlichen im Strafrecht. JBl. Jg. 85, 1963, S. 245 ff.

187. Koeder, H.: Die Irrtumsregelung im österreichischen und deutschen Strafgesetzentwurf. ÖJZ. 17. Jg. 1962. S. 337 ff

＊ 雜

188. Frauwallner, J.: Der Versuch im Schweizer Strafrecht. JBl. Jg. 74, 1952, S. 369 ff.

189. Herz, W.: Strafbare Vorbereitungshandlung? ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 587 f.

190. Herz, W.: Betrachtungen zur Strafbarkeit des Versuches. ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 82 ff.

191. Nowakowski, F.: Bemerkungen anlässlich des Aufsatzes: „Zur Strafbarkeit des Versuches“ von Hon.-Doz. Dr. W. Herz ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 334 ff.

192. Nowakowski, F.: Die Erscheinungsformen des Verbrechenens im Spiegel der Verbrechenauffassungen. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 596 ff.

193. Pichler-Drexler (仁藤采娘と采女采米) → 91.

194. Platzgummer, W.: Der freiwillige Rücktritt vom Versuch und seine Behandlung in der Fragestellung an die Geschwornen. JBl. Jg. 79, 1957, S. 1 ff., 37 ff.

＊ 総論

195. Liebscher, V.: Die mittelbare Täterschaft in der Recht-

sprechung des ÖHG. JBl. Jg. 81, 1959, S. 621 ff.

196. Schinnerer, E.: Um die Akzessorität der Teilnahme. JBl. Jg. 73, 1951, S. 454 ff.

臨終論

197. Großwang (藤采娘と采女采米) → 36.

198. Großwang, W.: Die Identität der Tat. JBl. Jg. 73, 1951, S. 56 ff.

199. Nowakowski, F.: Die Strafdrohung bei Konkurrenz. JBl. Jg. 83, 1961, S. 531 ff.

200. Pichler-Drexler (采米と采女采米) → 260.

刑罰論——| 禁

201. Fleisch, H.: Keine Amtshaftung für rechtswidrige schuldhafte Freiheitsentziehungen. ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 57 ff., 93 ff.

201-a. Grabberger, R.: Die Strafe. ÖJZ. 16. Jg. 1961, S. 169 ff.

202. Grabberger, R.: Der Ruf nach der Todesstrafe. JBl. Jg. 80, 1958, S. 429 ff.

203. Horrow, M.: Die Tübinger Strafrechtslehretagung und die Reform der Kriminalrechtlichen Unrechtsfolgen. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 614 f

204. Huber, H.: Die Todesstrafe und das außerordentliche Milderungsrecht. ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 361 f.

Jg. 72, 1950, S. 209 ff.

205. Jahoda, E.: Die Strafe als Funktion der Schuld. ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 322 f.

記事 (平熊平次博士宛書)

206. Janowsky, N.: Die „schärfere“ Strafe im Sinne der § 34 und 267 StG. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 486.

215. Brassloff, E.: Die Bedeutung der Novellierung des § 26 lit. g. Strafgesetz. JBl. Jg. 75, 1953, S. 36 f.

207. Kaniak, G.: Die Bestimmungen des Strafgesetzes über Amts- und Pensionsverlust im Lichte der Bundesverfassung. JBl. Jg. 75, 1953, S. 405 ff.

216. Brods, Ch.: Legislative und administrative Probleme des Strafvollzugs. JBl. Jg. 84, 1962, S. 407 ff.

208. Malaniuk, W.: Die Todesstrafe. JBl. Jg. 79, 1957, S. 85 ff.

217. Doleisch, W. u.a.: Versuch einer Rehabilitation des Schwerskriminelten Sonderanstalt Mittersteig. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 342 ff.

209. Malaniuk, W.: Strafe und Resozialisierung. ÖJZ. 12. Jg. 1957, S. 380 ff.

218. Frauwallner, J.: Das Straffreiheitsgesetz in Bayern. JBl. Jg. 70, 1948, S. 616 f.

210. Roeder (刑法博士以成徳に於ては懲罰の意義) → 137.

218-a. Grabberger (刑法博士以成徳に於ては懲罰の地位) → 129.

211. Schobesberger, O.: Das Problem der Strafe bei Thomas v. Aquin. Eine rechtsphilosophische Betrachtung. ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 566 ff.

219. Hoff, H. → 217.

212. Schirram, H.: Der Rückfall im österreichischen Strafrecht. JBl. Jg. 85, 1963, S. 179 ff.

220. Horrow, M.: Reform des Strafvollzuges in Schweden und England. ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 337 ff.

212-a. Spindel, G.: Die Begründung des richterlichen Strafmasses. ÖJZ. 19. Jg. 1964, S. 593 ff.

220-a. Kodak, G.: Kein bedingter Strafaufschub bei Bedachtnahme gemäss § 265 StPO. auf eine unbedingte Strafe? ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 645 ff.

213. Valters, N.: Die Todesstrafe im ordentlichen Verfahren. JBl. Jg. 68, 1946, S. 369 ff.

221. Kunst, G.: Ein Strafvollzugsgesetz für Österreich. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 34 f.

214. Valters, N.: Die Todesstrafe in der Sowjetunion. JBl.

222. Moser, B.: Zur Reform des Gesetzes über die bedingte Verurteilung und des Strafumwandlungsrechtes. JBl. Jg. 74, 1952,

S. 314 ff.

222-a. Pausa (ホノローの罪脱・犯罪脱) → 75.

223. Pfeifer, H.: Zur Novellierung des § 26 Strafgesetz. JBl. Jg. 75, 1953, S. 257 ff.

223-a. Sluga → 217.

224. Valters, N.: Erweiterung der bedingten Verurteilung.

ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 392 ff.

225. Wöhlfarth, P.: Englischs Gefängniswesen. JBl. Jg. 83, 1961, S. 628 ff.

罪 察

226. Baeck, P.L.: Verjährung in New York. JBl. Jg. 76, 1954, S. 11 ff.

227. Wentzel, O.: Die Hemmung der Verjährung. ÖJZ. 1. Jg. 1946, S. 329 f.

没収・押収

228. Abel, P.: Konfiskation und Expropriation vor englischen Gerichten. JBl. Jg. 74, 1952, S. 8 ff.

229. Janowsky, N.: Das selbständige Verfallsverfahren. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 230 ff., 263 ff., 291 ff.

230. Klein, G.: Beschlagnahme und Einziehung. JBl. Jg. 70, 1948, S. 8 ff.

受取戻金 (受贈還金や和弁)

231. Becker, A. M.: Psychiatrisches Erfahrungsgut und Bewährungshilfe. ÖJZ. 17. Jg. 1962, S. 621 ff.

232. Hein, R.: Vorbeugende Maßnahmen bei schuldunfähigen Tätern im Strafgesetzentwurf. JBl. Jg. 84, 1962, S. 292 ff.

233. Kunst, G.: Prognose und Bewährung. ÖJZ. 23. Jg. 1968, S. 64 ff.

234. Matouschek, A.: Die rechtlichen Grundlagen der Bewährungshilfe. ÖJZ. 17. Jg. 1962, S. 617 ff.

235. Pausa, E.: Das englische Probationssystem. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 507 ff., 536 ff.

236. Pausa, E.: Die bedingte Entlassung nach dem Strafrechtsänderungsgesetz 1960. ÖJZ. 17. Jg. 1962, S. 62 ff.

237. Reisholer, W.: „Bewährungshilfe“ im Ausland und in Österreich. ÖJZ. 15. Jg. 1960, S. 257 ff.

238. Reiter, P.J.: Die Behandlung der kriminellen Psychopathen in Dänemark. (Vortrag der Sitzung vom 26. 2. 1953) ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 297 f.

歴 案

239. Allinger-Osollich, Th.: Die Amnestie 1950. JBl. Jg. 72, 1950, S. 498 ff.

240. Czechowski, Th.: Anwendbarkeit der Amnestie 1950 auf

das Straftunwandlungsverfahren nach § 470 AbgO. und die vom Gericht ausgesprochenen Ersatzfreiheitsstrafen. JBl. Jg. 75, 1953, S. 408 ff.

241. Galtgr, H.: Fallen die Wertersatzstrafen und Verfallsersatzstrafen unter die Amnestie 1955? ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 306 f.

241-a. Harbich, H.: Gedanken zur Amnestie 1965. ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 589 ff., 621 ff.

242. Herr, W.: Der Einfluß des NS-Amnestiegesetzes auf Sonderverträge. JBl. Jg. 71, 1949, S. 326 ff.

243. Janowsky, N.: Einige Gedanken zur Amnestie 1957 und zu den strafrechtlichen Bestimmungen der NS-Amnestie 1957. JBl. Jg. 79, 1957, S. 253 ff.

244. Klecatsky, H.R.: Die staatsrechtlichen Wurzeln des Gnadengerichtes. JBl. Jg. 89, 1967, S. 445.

245. Klein, H.: Rechtsprechungsprobleme um das Amnestiegesetz 1965. JBl. Jg. 87, 1965, S. 355.

246. Matouschek, A.: Die Amnestie 1955. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 217 ff.

246-a. Matouschek, A.: Die Amnestie 1965. ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 225 ff.

247. Schimk, A.: Zur Befreiungsamnestie. JBl. Jg. 68, 1946, S. 497 ff.

248. Serini, E.: Die Amnestie 1950. ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 419 ff.
249. Serini, E.: Zur Anwendung der Amnestie 1950. ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 497 ff.

250. Sturm, H.: Zur Amnestie 1950. ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 495 ff.
251. Sturm, H.: Voraussetzungen und Umfang des Gnadenrechtes. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 573 ff.

中 露

國際法及刑法上の問題

252. Huber, H.: Zur Problematik der österreichischen politischen Strafjustiz. JBl. Jg. 70, 1948, S. 308 ff.

253. Liebscher, V.: Österreichs Neutralität und ihr strafrechtliche Schutz. JBl. Jg. 78, 1956, S. 597 ff., 633 ff.

254. Moser, B.: Die Auswirkungen der dauernden Neutralität auf das Straf- und Zivilrecht. ÖJZ. 11. Jg. 1956, S. 85 ff., 113 ff.

255. Verdoff, A.: Die mehrfache Bedeutung des diplomatischen Schutzrechts. JBl. Jg. 86, 1964, S. 581 ff.

256. Piska jun., K.: Zur Strafbarkeit falscher Angaben von Auskunftspersonen vor der Gendarmerie. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 206 f.

257. Liebscher, V.: Der Mißbrauch der Amtsgewalt. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 213 ff.

258. Santner, A.: Novellierung des § 312 StG.—ein Gebot der Zeit. JBl. Jg. 73, 1951, S. 589 f.

259. Glotz, F.: Der „schienegebundene“ § 312 StG. JBl. Jg. 77, 1955, S. 247.

260. Pichler, J.: Ist Idealkonkurrenz zwischen § 312 StG. und § 487 ff. StG. rechtlich denkbar? ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 512 ff.

社会益を損じ得る罪

261. Arnold, E.: Waffen und Waffenverbote. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 598 ff., 623 ff.

262. Horrow, M.: Der Kampf gegen das Kunstfälschertum. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 371 ff.

263. Liebischer, V.: Die Urkundenfälschung. ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 489 ff.

個人を侵害し得る罪

264. Gebauer, H.: Strafrechtliches um den Maibaum. ÖJZ. 6. Jg. 1951, S. 189.

264-a. Mayer, R.: Der Begriff „Mensch“ im Strafrecht. ÖJZ. 19. Jg. 1964, S. 383 ff.

265. Serini, E.: Verletzungen der Privatsphäre im Österreichischen Strafgesetzentwurf. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 337 ff.

265-a. Tschulik, O.: Der strafrechtliche Unterhaltsschutz. ÖJZ.

20. Jg. 1965, S. 541 ff.

——社会に利益を損じ得る罪——

266. Bydlinski, F.: Die strafrechtliche Beurteilung von Sportverletzungen. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 159 ff.

267. Edlbacher, O.: Die Haftung der Eisenbahn für Tötung und Verletzung von Reisenden im Rahmen der CIV. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 449.

268. Kittl, E.: Über die Sonderbestimmungen des § 419 StG. JBl. Jg. 76, 1954, S. 59 ff.

268-a. Kittl, E.: Die Tierquälerei im österreichischen Strafgesetzentwurf. ÖJZ. 19. Jg. 1964, S. 169 ff.

269. Kunst, G.: § 431 StG. und die sogenannte konkrete Gefährdung. ÖJZ. 15. Jg. 1960, S. 622 ff.

270. Kunst, G.: § 431 StG. und die Strafrechtsreform. ÖJZ. 16. Jg. 1961, S. 451 ff.

271. Kunst, G.: Zur Auslegung des Wortes „Mensch“ im § 335 StG. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 599 ff.

272. Fleisch, H.: Die Regelung des Abtreibungsproblems in den Strafgesetzen der Gegenwart. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 584 ff.

273. Heib, H.: Ärztlich-juridische Gesichtspunkte zum Problem der Schwangerschaftsunterbrechung. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 505 ff.

274. Hofmann, H.: Zur Frage, ob und inwieweit die Leib-

Frucht durch die Bestimmung des § 335 StG. geschützt wird. ÖJZ 18. Jg. 1963, S. 284 ff.

275. Weber-Webenau, R.: Die Entwicklung der gerichtlichen Wahrheitsfindung vom Zweikampf bis zum Eid. JBl. Jg. 74, 1952, S. 82 ff.

—— (資料整理) ——

—— 田中良太郎氏 ——

276. Bamberger, H.: Reichen die gesetzlichen Strafbestimmungen zur Abhandlung von Kindesmisshandlungen aus? JBl. Jg. 75, 1953, S. 11 f.

277. Bamberger, H.: Strafbarkeit der Eltern bei grober Vernachlässigung ihrer Erziehungspflichten? JBl. Jg. 78, 1956, S. 118 ff.

278. Beitner, M.: Reichen die gesetzlichen Strafbestimmungen zur Abhandlung von Kindesmisshandlungen aus? JBl. Jg. 75, 1953, S. 343.

279. Ehrenzweig, A.: Der Schadenersatz für widerrechtliche Freiheitsentziehung. ÖJZ 7. Jg. 1952, S. 645

280. Gruber, P.: Zum Tatbestand der gefährlichen Drohung nach § 99 StG. ÖJZ. 13. Jg. 1958, S. 516 f.

281. Horak, E.: Zum Tatbestand der gefährlichen Drohung nach § 99 StG. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 173 ff.

—— 田中良太郎氏 ——

282. Brachmann, G.: Der Hausfrieden im Spiegel mittelalterlichen Rechtes. JBl. Jg. 74, 1952, S. 485

—— 田中良太郎氏 ——

283. Nowakowski, F.: Üble Nachrede oder Schmähung? ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 494 ff.

284. Wentzel, O.: Die Verfolgung von Ehrenbeleidigungen durch den Staatsanwalt. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 105 ff.

—— 藤野・嶋嶺氏 ——

285. Großwang, W.: Vom Schutzobjekt der Strafsanktion nach § 206, 207 StG. JBl. Jg. 72, 1950, S. 425 ff.

286. Liebscher, V.: Die strafrechtliche Abhandlung der Verletzung ehelicher Treue. JBl. Jg. 82, 1960, S. 367 ff.

—— 藤野・嶋嶺氏 ——

287. Schinnerer, E.: Noch einmal — das Bankgeheimnis. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 303 ff.

—— 藤野氏 ——

288. Heidrich, K.: Geld und Geldeswert im Strafrecht. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 71 ff.

289. Eggeler, S.: Stromdiebstahl. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 11 ff.

290. Höhenleiner, S.: Diebstahl oder unbefugter Gebrauch von Kraftfahrzeugen. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 242 f.

291. Hövelmann, C.: Die Strafbarkeit der Unterschlagung nach österreichischem Recht. JBl. Jg. 70, 1948, S. 26 ff.

292. Milsch, H.: Kritische Betrachtung der Behandlung des Willkürdelictes in der Judikatur. ÖJZ. 16. Jg. 1961, S. 204.

293. Nowakowski, F.: Zur Rechtsprechung des Obersten Gerichtshofes zu § 205 c StG. JBl. Jg. 86, 1964, S. 289 ff.

294. Piska, K.: Zur Auslegung und Anwendung des § 178 StG. JBl. Jg. 84, 1962, S. 252 f.

295. Roeder, H.: Der strafrechtliche Gewahrsamsbegriff. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 373 ff.

296. Schaffran, E.: Zur Frage der Kunstfälschung, Kunstverfälschung und des Kunstbetruges. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 650 ff.

297. Seiler, R.: Der Rückfalldiebstahl. JBl. Jg. 80, 1958, S. 537 ff.

298. Sturm, H.: Was ist Bedrängnisdiebstahl? ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 420.

299. Winfried, P.V.: Zur Frage der Strafbarkeit des Gebrauchsdiebstahls. JBl. Jg. 74, 1952, S. 172 f.

300. Winfried, P.V.: Zum Automatenmißbrauch. ÖJZ. 15. Jg. 1960, S. 347 f.

匪類審判

301. Adamovich, L.: Die verfassungsmässige Funktion des Richters. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 409 ff.

302. Feuchter, H.: Zur Frage der Justizreform. JBl. Jg. 73,

1951, S. 329 ff.

303. Fundulus, W.: Gedanken über den richterlichen Nachwuchs. ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 125 ff.

304. Henrich, G.: Juristenberufe. JBl. Jg. 70, 1948, S. 131 ff., 202 ff.

305. Henrich, G.: Juristenberufe. JBl. Jg. 72, 1950, S. 29 ff.

306. Hoffmann, E.: Geschichte des Gerichtswesens in Tirol. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 493 ff.

307. Leonhard, O.: Rechtswissenschaft und Lebenserfahrung. ein Wort zur Ausbildung der Richter. ÖJZ. 1. Jg. 1946, S. 2 ff.

308. Liebischer, V.: Die XI. Gesetzgebungsperiode des Nationalrates und die Justizreform. JBl. Jg. 88, 1966, S. 398 ff.

309. Melichar, E.: Zur Reform des juristischen Studiums. JBl. Jg. 73, 1951, S. 583 ff.

309-a. Nowakowski, F.: Die Grund- und Menschenrechte in Relation zur strafrechtlichen Gewalt. ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 281 ff.

310. Rašovský, A.: Zur Reform des Rechtsstudiums. JBl. Jg. 73, 1951, S. 473 ff.

采捕審判

——採捕審判——

311. Broda, C.: Die Ausgangslage bei der Reform des Straf-

prozeßrechtes. ÖJZ. 17. Jg. 1962, S. 197 ff.

312. Frauwallner, J.: Gedanken zur Strafprozeßnovelle 1947.

JBl. Jg. 71, 1949, S. 93 f.

313. Jahoda, E.: Zur Reform der Strafprozeßordnung. ÖJZ. 4.

Jg. 1949, S. 468 ff.

314. Janowsky, N.: Reformfragen strafprozessualer Natur.

JBl. Jg. 74, 1952, S. 196 ff.

315. Obendorf, R.: Der Entwurf eines Strafprozeßänderungsgesetzes 1965 und die Praxis. JBl. Jg. 88, 1966, S. 22 ff.

316. Schimak, A.: Zum Umbau und Ausbau der Strafprozeßordnung. JBl. Jg. 71, 1949, S. 382 ff.

317. Schimak, A.: Zum Um- und Ausbau der Strafprozeßordnung. JBl. Jg. 72, 1950, S. 301 ff.

318. Serini, E.: Die Umgestaltung des vereinfachten Verfahrens durch die Strafprozeßnovelle vom Jahre 1949. ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 317 ff.

——民監刑1製(本圖刑監刑)——

319. Couture, E. J.: Der verfassungsmäßige Schutz des Prozeßes. JBl. Jg. 76, 1954, S. 237 ff., 270 ff.

320. Ehrenzweig, A.: Die freie Rechtsfindung des Schweizer Bundesgerichtes. JBl. Jg. 75, 1953, S. 146 ff.

321. Fenzl jun., F.: Ist die Eventualmaxime im Bestandsverfahren zeitgemäß? ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 226 ff.

322. Fischer, J.: Neues schwedisches Prozeßrecht. ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 493 ff.

323. Grabberger, R.: Aus der Praxis des anglo-amerikanischen Strafverfahrens. JBl. Jg. 75, 1953, S. 1 ff., 29 ff.

324. Heimisch, R.: Die Ethik der Entscheidung. JBl. Jg. 75, 1953, S. 393 ff.

325. Huber, M.: Die neue tschechische Strafprozeßordnung. JBl. Jg. 73, 1951, S. 104 ff.

326. Lenhoff, A.: Zwei interessante Einrichtungen des Amerikanischen Prozeßrechtes. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 437 ff.

327. Liebscher, V.: Neue Wege des Strafverfahrens. ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 8 ff.

328. Liebscher, V.: Der französische Strafprozeß und einige an ihm gemessene Probleme des österreichischen Strafverfahrens. JBl. Jg. 83, 1961, S. 173 ff.

329. Linke, R.: Das jugoslawische Gesetz über das Strafverfahren vom 10. Sept. 1953. ÖJZ. 11. Jg. 1956, S. 227 ff.

330. Malaniuk, W.: 100 Jahre Kreisgericht Kornenburg. JBl. Jg. 76, 1954, S. 317 ff.

331. Malaniuk, W.: Wandel der Strafgerichtsbarkeit. JBl. Jg. 80, 1958, S. 297 ff., 322 ff., 352 ff.

332. Marschall, K.: Gelten noch die Verfassungsbestimmungen des Schöffentistengesetzes 1946? ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 311 ff.

333. Nowakowski, F.: Grundfragen der Lehre vom Strafprozess. JBl. Jg. 77, 1955, S. 1, 30 ff.
334. Roeder, H.: Funktion und Grenzen der formellen Verteidigung im Anklageprozess. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 231 ff., 258 ff.
335. Reissig, G.: Gilt die Strafprozessnovelle 1877? JBl. Jg. 77, 1955, S. 468 f.
- 335-a. Zitta, R.: Die Zuständigkeit der Gerichte in Gnaden-sachen nach § 411 StPO. und das Bundesverfassungsgesetz. ÖJZ. 19. Jg. 1964, S. 229 ff., 253 ff.
336. Kobzina, A.: Die Ermessensnorm im Licht des Legalitätsprinzips. JBl. Jg. 78, 1956, S. 492.
337. Pichler-Drexler (仁徳罪状と免状の理論的考察) → 93.
338. Seiler, R.: Legalitätsprinzip und Weisungsrecht im Strafprozess. JBl. Jg. 87, 1965, S. 1 ff.
- 控訴案件法———
339. Kadetka, F.: Zur geplanten Wiedereinführung der Geschworenengerichte. ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 513 f.
340. Liebscher, V.: Das Verfahren vor den Geschwornen. ÖJZ. 6. Jg. 1951, S. 113 ff.
341. Rehn, E.: § 362 StPO. und das Geschworenengerichtsverfahren. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 277 ff.
342. Rehn, E.: Nochmals, § 362 StPO. und das Geschworenengerichtsverfahren. JBl. Jg. 83, 1961, S. 333 ff.
343. Rittler, Th.: Zur Regierungsvorlage über die Wiedereinführung der Geschworenengerichte. JBl. Jg. 72, 1950, S. 517 ff.
344. Wolf, A.: Fragen der Praxis des Geschworenengerichtes. ÖJZ. 6. Jg. 1951, S. 476 ff.
- 控訴法・控訴法———
345. Malanuk, W.: Heraushebung der Richter. ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 265 ff.
346. Malanuk, W.: Ausgestaltung der richterlichen Unabhängigkeit. JBl. Jg. 71, 1949, S. 273 ff.
347. Malanuk, W.: Standesfragen der Richter und Staatsanwälte. ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 619 ff.
348. Marcic, R.: Sinn des Weltbundes der freien Richter. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 575 ff.
349. Marcic, R.: Der Richter und die Verfassung. JBl. Jg. 83, 1961, S. 385 ff.
- 検察官 (仁徳罪状) ———
350. Fiala, M.: Dezentralisation der Staatsanwaltschaft. JBl. Jg. 71, 1949, S. 283 f.
351. Fischschweiger, H.: Zur Frage der Weisungsfreiheit der Staatsanwälte. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 421.
352. Liebscher, V.: Die Stellung der Generalprokuratur im österreichischen Strafprozess. JBl. Jg. 80, 1958, S. 245 ff.
353. Schinnerer, E.: Um die Stellung der Polizei im Straf-

verfahren. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 626 ff.

——朱鷲人——

354. Braun, R.: Die österreichische Rechtsanwaltschaft seit 1945. JBl. Jg. 75, 1953, S. 448 f.

355. Czechowski, Th.: Unterschiedliche Anwendung der Richtlinien für die Ausübung des Rechtsanwaltsberufes durch den Disziplinarrat der Rechtsanwaltskammer Wien. JBl. Jg. 75, 1953, S. 145.

356. Czechowski, Th.: Nochmals die unterschiedliche Anwendung der Richtlinien für die Ausübung des Rechtsanwaltsberufes durch den Disziplinarrat der Rechtsanwaltskammer Wien. JBl. Jg. 75, 1953, S. 539.

357. Jahoda, E.: Unterschiedliche Anwendung der Richtlinien für die Ausübung des Rechtsanwaltsberufes durch den Disziplinarrat der Rechtsanwaltskammer Wien. JBl. Jg. 75, 1953, S. 319.

358. Weisl, G.: Die soziale und pekuniäre Stellung des Anwalts. JBl. Jg. 75, 1953, S. 477 ff.

——鷲人——

359. Hohenleiter, S.: Die Aufgabe des Sachverständigen bei der Beurteilung von Verkehrsunfällen. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 609 ff.

360. Nowakowski, F.: Sachverständiger oder Zeuge? ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 394 ff.

361. Seucher, L.: Die Haftung des Sachverständigen für sein Gutachten. ÖJZ. 16. Jg. 1961, S. 225 ff.

362. Schneider, Ph.: Das ärztliche Sachverständigenwesen in Österreich und in Schweden. JBl. Jg. 72, 1950, S. 53 ff.

——鷲人・中津——

363. Kropfning, J.: Zum Abgrenzungsproblem Aufrechnungseinfrede — Vorprozessuale Aufrechnung. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 590 ff.

364. Foregger, E.: Darf der Untersuchungsrichter die Sicherheitsbehörde mit der Durchführung einer Hausdurchsuchung betrauen? ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 394 ff.

365. Gaigg, H.: Ist die Hausdurchsuchung bei Rechtsanwaltsen und Verteidigern zum Zwecke der Beschlagnahme ein durch das Gesetz gedeckter Vorgang? ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 639 f.

366. Glück, K.: Gedanken zum geplanten Wegfall der obligatorischen Untersuchungshaft. JBl. Jg. 88, 1966, S. 354 ff.

367. Hövelmann, C.: Das Recht der persönlichen Freiheit und die gerichtliche Untersuchungshaft. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 343 ff.

367-a. Jann, P.: Zur Beschlagnahme in Pressesachen. ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 287 ff.

368. Janowsky, N.: Die Unterbrechung der Untersuchungshaft zum Zwecke der Vollstreckung einer gerichtlichen Strafhaft und § 12 (1) des Gesetzes über die bedingte Verurteilung 1949.

JBl. Jg. 85, 1963, S. 466 ff.

369. Kaan, R.: Gerichtliche Voruntersuchung und polizeiliche Hausdurchsuchung. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 640 f.

370. Marschall, K.: Obligatorische Untersuchungshaft im zweiten Rechtsgang nach Aufhebung des Freispruches? ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 281 ff.

371. Mayerhofer, Ch.: Die Voruntersuchung als Voraussetzung für die Verhängung der Untersuchungshaft. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 485 ff.

371-a. Schönfeld (中兼ニ兼懸望編譯) → 383.

371-b. Schwarz, A.: Die rechtliche Bedeutung der polizeilichen Einvernahme. JBl. Jg. 76, 1954, S. 485 ff.

372. Serini, E.: Die praktische Anwendung der Verwahrungs- und Untersuchungshaft. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 283 ff.

——— 註 釋 ———

373. Beeck, P.: Regeln des Beweisverfahrens (Rules of Evidence) in den USA. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 35 ff., 63 ff., 85 ff.

374. Cichocki, R.: Zur Fragestellung und Rechtsbelehrung im Verfahren vor den Geschworenengerichten. JBl. Jg. 73, 1951, S. 362 ff.

375. Heidrich, K.: Die Zeugenansage Jugendlicher im Strafverfahren. ÖJZ. 2. Jg. 1947, S. 237 ff.

376. Heidrich, K.: Zur Beweiswürdigung im Strafverfahren.

JBl. Jg. 70, 1948, S. 136 ff.

377. Herz, W.: Über die Beschränkung der freien Beweiswürdigung durch Rechtsmittelinstanzen. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 64 ff.

377-a. Loebenstein, H.: Das ärztliche Sachverständigengutachten als Beweismittel im Strafprozess. ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 345 ff.

378. Metall, R.A.: Internationale Pressefreiheit und Wahrheitspflicht. JBl. Jg. 72, 1950, S. 35.

379. Nowakowski, F.: Sind Verfahren zur Erzielung unwillkürlicher Äußerungen des Beschuldigten zulässig? JBl. Jg. 71, 1949, S. 4 ff.

380. Nowakowski, F.: Der Beweis. JBl. Jg. 81, 1959, S. 69 f.

381. Prettenhofer, H.: Die Meinungsforschung als Beweis. ÖJZ.

9. Jg. 1954, S. 556 ff.

382. Santner, A.: Das Hauptverhandlungsprotokoll. Ein Diskussionsbeitrag zur geplanten Teilreform der StPO. ÖJZ. 17. Jg. 1962, S. 593 ff.

383. Schönfeld, E.: Das Vorverfahren und das Recht der Akten-einsicht im Strafprozeß. JBl. Jg. 70, 1948, S. 336 ff.

384. Schwamm, S.: Zur Beweiswürdigung im Strafverfahren.

ÖJZ. 4. Jg. 1949, S. 231 f.

385. Seiler, R.: Die Verwendung des Tonbandes im Strafprozeß. JBl. Jg. 85, 1963, S. 68 ff.

386. Siegert, K.: Rechtswidrige und rechtmäßige Tonbandaufnahmen im deutschen Recht. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 228 ff.

387. Skotber, H.H.: Das offene Geständnis als Milderungsgrund. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 429 f.

388. Tehadak, O.: Der Beweis im Prozeß. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 430.

——— 婚姻関係維持 ——

389. Jahoda, E.: Gilt §152 StPO. auch für geschiedene Ehegatten? JBl. Jg. 86, 1964, S. 199 f.

390. Kunst, G.: Zweifelsfragen um die berechnigte Zeugnisverweigerung im Strafverfahren. JBl. Jg. 79, 1957, S. 346 ff.

391. Roeder, H.: Die Zeugnisbefreiung naher Angehöriger des Beschuldigten und ihre Grenzen. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 44 ff., 76 ff.

——— 訴訟手続 ——

392. Krallik, R.: Mängel des rechtlichen Gehörs. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 3 ff.

393. Herz, W.: Über Schlussigkeit des Strafurteils. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 570 f.

394. Herz, W.: In dubio pro 'iudicio? ÖJZ. 11. Jg. 1956, S. 253 f.

395. Hohenleitner, S.: Die zureichende Begründung des Strafurteils. ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 317 ff.

396. Kunst, G.: Das Fehlurteil im Strafprozeß. ÖJZ. 15. Jg. 1960, S. 486 ff.

397. Nowakowski, F.: Die materielle Rechtskraft des Schuldspruchs. ÖJZ. 3. Jg. 1948, S. 546 ff.

398. Walter, R.: Zur Problematik der juristischen Entscheidung. JBl. Jg. 88, 1966, S. 225 ff.

——— 終端・手続手続 ——

399. Bernardini, E.: Rechtsmittelbelehrung nach der Urteilsfällung im Strafverfahren. JBl. Jg. 85, 1963, S. 418 ff.

400. Piska, K.: Probleme des schöff- und geschwornengerichtlichen Berufungsverfahrens. JBl. Jg. 86, 1964, S. 80 ff.

401. Fischelschweiger, H.: Zur Behandlung der „besonders leichten Fälle“ im Entwurf eines Strafprozeßänderungsgesetzes. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 561 ff.

402. Granichstaeden-Czerwa, R.: Hat §400 StPO. noch Berechtigung? ÖJZ. 6. Jg. 1951, S. 616 f.

403. Hohenleitner, S.: Der Kostenspruch im Strafverfahren. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 247 ff.

404. Kremzow, F.W.: Über die Behandlung der in der Hauptverhandlung begangenen Straftaten. ÖJZ. 15. Jg. 1960, S. 179 ff.

405. Liescher, V.: Die „Klagsänderung“ im Strafverfahren (§ 263 StPO.). ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 203 ff.

406. Melnizky, W.: Zur Anwendung des § 265 StPO. ÖJZ. 22.

Jg. 1967, S. 29.

407. Nowakowski, F.: Abänderung und Aufhebung auf Grund einer Nichtigkeitsbeschwerde zur Wahrung des Gesetzes. JBl. Jg. 80, 1958, S. 589 ff.

408. Nowakowski, F.: Zum standgerichtlichen Verfahren. Ein zusätzliches Bedenken. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 1 ff.

409. Paska, K.: Kein bedingter Strafaufschub bei Bedacht-
nahme gemäß § 265 StPO auf eine unbedingte Strafe? ÖJZ. 21.
Jg. 1966, S. 150 ff.

410. Rehm, E.: Zur Entstehungsgeschichte des § 450 StPO.
ÖJZ. 16. Jg. 1961, S. 281 ff.

411. Ritter, Th.: Nichtigkeitsbeschwerde zur Wahrung des
Gesetzes und Entscheidung über die privatrechtlichen Ansprüche.
ÖJZ. 12. Jg. 1957, S. 253 f.

412. Roeder, H.: Zur Überprüfung der Tatfrage im Nichtig-
keitsverfahren. JBl. Jg. 82, 1960, S. 521 ff.

413. Schwarz, A.: Mehr Schutz den Privatbeteiligten bei
Strafverfahren. JBl. Jg. 73, 1951, S. 78 f.

414. Sturm, H.: Kann der Privatankläger im Strafverfahren
auch privatrechtliche Ansprüche geltend machen? ÖJZ. 4. Jg.
1949, S. 120 ff.

415. Walter, R.: Zur Auslegung und Entstehungsgeschichte
des § 450 StPO. ÖJZ. 16. Jg. 1961, S. 365 ff.

今昔案集' 今昔案録' N 6 理

416. Aron, E. Vorläufige Maßnahmen der Sicherung und
Erziehung im Jugendstrafverfahren. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 169 ff.

417. Bamberger, H.: Ist eine Reform des Jugendstrafrechtes
notwendig? JBl. Jg. 72, 1950, S. 155 f.

418. Bamberger, H.: Kleine Reform des Jugendstrafrechtes
und -verfahrens. JBl. Jg. 76, 1954, S. 194 ff.

419. Bamberger, H.: Zur Frage der Altersgrenzen und der
Trennung der Heranwachsenden in zwei Gruppen im kommenden
Strafgesetz. JBl. Jg. 85, 1963, S. 522 ff.

419-a. Bamberger, H.: Das künftige Strafrecht und die Heran-
wachsenden. ÖJZ. 19. Jg. 1964, S. 286 ff.

419-b. Bamberger, H.: Welche Änderungen des JGG 1961
wären bei Inkrafttreten eines neuen Strafgesetzes wünschens-
wert? ÖJZ. 20. Jg. 1965, S. 385 ff.

420. Beitner, M.: Rechtsprobleme der Jugendwohlfahrt. JBl.
Jg. 81, 1959, S. 169 ff.

421. Beitner, M.: Vormundschaftsbehördliche Verfügungen
durch das Jugendstrafgericht. JBl. Jg. 83, 1961, S. 263 f.

422. Casafura, F.: Löschung oder Tilgung von Verurteil-
ungen zu Jugendarrest (Wochenarrest)? ÖJZ. 3. Jg. 1948, S.
515 f.

423. Casafura, F.: Gedanken zu einer Reform des Jugendstraf-

rechtes. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 533 ff.

424. Erhart, F.: Die Anwendung des § 30 JGG. JBl. Jg. 70. 1948, S. 560.

425. Foregger, E.: Über die materiell-strafrechtlichen Bestimmungen des Jugendgerichtsgesetzes 1961. ÖJZ. 17. Jg. 1962, S. 645 ff.

426. Harbich, H.: Die Verschwiegenheit in Jugendstrafsachen. JBl. Jg. 86, 1964, S. 126 ff.

427. Harbich, H.: Jugendstrafrechtliche Miscellen. Eine kasuistische Kritik des formellen und des materiellen Jugendstrafrechts. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 337 ff., 367 ff., 452 ff.

428. Heidrich, K.: Das französische Jugendstrafrecht. ÖJZ. 1. Jg. 1946, S. 530 ff.

429. Heidrich, K.: Die Entwicklung der Strafgesetzgebung für jugendliche Rechtsbrecher und Gedanken über eine Reform des Jugendstrafrechtes. JBl. Jg. 71, 1949, S. 305 ff.

430. Heidrich, K.: Der Strafanspruch nach einem Schuldspruch gemäß § 13 Abs. 1. JGG. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 373 ff., 572 f.

431. Heidrich, K.: Ist eine Reform des Jugendgerichtsgesetzes erforderlich? ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 655 ff.

432. Hönigschmid, F.: Zur Tagung der österreichischen Jugendrichter in Wien. ÖJZ. 11. Jg. 1956, S. 428 ff.

433. Horrow, M.: Bemerkungen zur Frage der Behandlung

junger Rechtsbrecher. ÖJZ. 5. Jg. 1950, S. 253 ff.

434. Kleßwetter, R.: Zuständigkeit und Aufgaben des Vormundschaftsgerichtes nach dem Jugendgerichtsgesetz 1961. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 256 ff.

435. Kittl, E.: Zur Reform des Jugendstrafrechtes. JBl. Jg. 71, 1949, S. 589 f.

435-a. Kunst, G.: Jugendstrafrecht für Heranwachsende? ÖJZ. 19. Jg. 1964, S. 29 ff.

436. Nowakowski, F.: Zu den strafrechtlichen Bestimmungen des Jugendgerichtsgesetzes 1961. JBl. Jg. 84, 1962, S. 469 ff.

437. Nowakowski, F.: Die strafrechtliche Komponente der Behandlung junger Rechtsbrecher. JBl. Jg. 83, 1961, S. 105 ff.

438. Obendorf, R.: Der zweite Satz des § 27 (2) JGG. 1961. JBl. Jg. 85, 1963, S. 612 f.

439. Pausa, E.: Das englische Jugendstraf- und vormundschaftsrecht. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 370 ff., 399 ff.

440. Pichler-Drexler, E.: Bewegliche Altersgrenzen im Jugendstrafrecht. ÖJZ. 11. Jg. 1956, S. 36 ff., 63 ff.

441. Pichler, G.: Das Jugendgerichtsgesetz und die Schwierigkeiten seiner Anwendung. ÖJZ. 1. Jg. 1946, S. 263 ff.

442. Pichler, J.: Gesetzswidrige Strafverfügung gegen einen Jugendlichen — Rechtsstellung seines gesetzlichen Vertreters. JBl. Jg. 82, 1960, S. 93 ff.

443. Piska jun., K.: Zum Gerichtsstand des Wohnsitzes oder Aufenthaltsortes im Strafverfahren in Jugendsachen. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 568 f.

444. Reissig, G.: Vereitelung behördlich angeordneter Erziehungsmaßnahmen und ihre Bestrafung. ÖJZ. 10. Jg. 1955, S. 531 ff.

445. Reissig, G.: Zur Auslegung des § 14 JGG 1949. ÖJZ. 11. Jg. 1956, S. 571 ff.

446. Reissig, G.: Zur Auslegung des § 2 JGG 1949. ÖJZ. 16. Jg. 1961, S. 144 ff.

447. Reissig, G.: Die Sonderbestimmungen für das Strafverfahren und den Strafvollzug im Jugendgerichtsgesetz 1961. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 58 ff., 93 ff.

448. Reissig, G.: Die Strafrechtsreform und das Jugendgerichtsgesetz 1961. ÖJZ. 21. Jg. 1966, S. 617 ff.

449. Schindler, S.: Bewährungshilfe und Anstaltseinweisung als Mittel der Strafpolitik bei Jugendlichen. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 205 ff.

450. Schreiner, K.: Die Möglichkeit der Resozialisierung schwerer krimineller Jugendlicher im Strafvollzug. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 625 ff.

451. Tschulik, O.: Die vormundschaftsbehördlichen Verfügungen nach § 2 JGG. 1961 in verfahrensrechtlicher Schau. JBl. Jg. 84, 1962, S. 486.

452. Weinzierl, J.: Gesetzwidrige Strafverfügung gegen einen Jugendlichen—Rechtsstellung seines gesetzlichen Vertreters. JBl. Jg. 81, 1959, S. 589 f.

453. Wentzel, O.: Das Jugendwohlfahrtsgesetz. ÖJZ. 9. Jg. 1954, S. 468 ff.

犯罪非-ノニ關聯案件

454. Frey, E.: Kriminologische Leitgedanken für die Behandlung der Frühkriminellen. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 548.

455. Grabberger, R.: Die Entwicklungstendenzen der Sexualkriminalität. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 225 ff.

456. Haupt, F.: Die Kriminalität in der Statistik. JBl. Jg. 74, 1952, S. 29 ff.

457. Harrow, M.: Die 6. Tagung der Kriminalbiologischen Gesellschaft in München. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 291 ff.

458. Jarosch, K.: Der pathologische Rausch. ÖJZ. 14. Jg. 1959, S. 626 f.

459. Kübl, F.: Juristische Psychologie. JBl. Jg. 77, 1955, S. 509 ff.

460. Kunst, G.: Die Regierungsvorlage eines Strafvollzugsgesetzes in kriminalpolitischer Sicht. ÖJZ. 22. Jg. 1967, S. 533 ff.

461. Lustig, J.: Gedanken zu einer Strafgesetznovelle, durch welche eine strengere Bestrafung von im Rauszustand began-

genen Übeltaten vorgesehen und einer Unterlassung gebotener Hilfeleistung strafrechtliche Bedeutung verliehen werden soll. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 29 ff.

462. Marcic, R.: Das KPD-Urteil. JBl. Jg. 78, 1956, S. 548 ff.

463. Modler, O.: Zur Frage der Bedeutung der Betriebspsychologie für die Personalpolitik im öffentlichen Dienst. ÖJZ. 17. Jg. 1962, S. 141 ff.

464. Reimer, P.: Kriminalstatistik für das Jahr 1946 mit 3 Textabbildungen. JBl. Jg. 71, 1949, S. 565 ff.

465. Reissner, H.: Probleme der forensischen Psychiatrie in der Praxis. ÖJZ. 8. Jg. 1953, S. 491.

466. Schramm, H.: Kriminologische Seminararbeiten. JBl. Jg. 84, 1962, S. 130 ff.

467. Teirich = Seebig: Die moderne Bekämpfung des Alkoholismus vom Standpunkt des Mediziners und Juristen. JBl. Jg. 72, 1950, S. 542 ff.

468. Trojan, R.: Zur Kenntnis der morphologisch-erbologischen Untersuchung. JBl. Jg. 72, 1950, S. 474 ff.

469. Tschadek, O.: Alkohol und Verbrechen. ÖJZ. 7. Jg. 1952, S. 309 ff.

470. Würtzenberger, Th.: Gesellschaft für Strafrecht und Kriminologie. Soziale Aspekte bei Beurteilung und Behandlung von Rechtsbrechern. ÖJZ. 18. Jg. 1963, S. 318 ff.